

(5) 北海道夕張高校の資料

- 夕 1 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》
 - 夕 2 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第2次》
 - 夕 3 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施報告書（1年次）
 - 夕 4 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（2年次）
 - 夕 5 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（2年次）
 - 夕 6 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（3年次）
 - 夕 7 全道地学協働活動研究大会発表資料
 - 夕 8 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（3年次）
-

資料 タ 1

令和3年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》

学校名	北海道夕張高等学校
作成日	令和3年6月30日

1 課題把握

(1) これまでの学校と地域の関係・取組

- ・夕張市との「高校魅力化事業」の取組
都立八丈高校との交流、海外短期留学、オンライン英会話、公設塾 等
- ・夕張市と連携し、バス待合スペース(バスまちスポット)の空間デザインの制作
- ・ボランティア同好会による「こども食堂」へボランティア支援
- ・地域行事への参加や支援活動
夏まつり、街頭清掃活動、花壇制作 など
- ・地域商店との商品開発(石炭マドレーヌ)

(2) 現状における課題

「地域と学校の連携における課題」

- ・専門人材としてのコーディネーターの不在
- ・多様な組織(人)と組織(人)をつなぐチームとしての機能の創設
- ・共通の創りたい未来の姿(ビジョン)づくり

「生徒の学びの姿勢」

- ・主体的、対話的に学ぶ姿勢の育成
- ・課題解決に向けて人と協働する姿勢の育成
- ・主体的に社会に参画し貢献する姿勢の育成

「探究型学習の内容」等

- ・地域の魅力を再発見・再認識に基づく地域活性化への提案
- ・夕張市の未来のビジョンを描く地域活性化への提案

2 仮説検討・テーマ設定・目標設定

(1) 研究仮説

- ① 地域の将来像を構想し共有した上で、関係者が協同して取り組むことで、夕張市の地域活性化に繋がる継続性のある取組となるだろう。
- ② 振り返りの場の設定や生徒の意見を反映させる工夫など、生徒が意欲を持ってチャレンジできるプロセスを重視することで、主体的に学習に取り組み、社会の形成に参画・貢献しようとする意識が高まるだろう。

〔検証方法〕

- ・『高校魅力化評価システム』の活用

(2) 研究テーマ

夕張の未来を創る人材育成のための学校・地域協働体制の再構築

資料 タ 1

(3) 今年度の目標

- ① 「炭鉄港よる地域活性化を」をキーワードとした高校生と地域住民、関係者間のネットワークづくり
- ② 日本遺産「炭鉄港」関連商品のパッケージデザインと特産品の考案を通じた「主体的・対話的で深い学び」の実現
- ③ 「高校魅力化評価システム」を活用した「評価方法」の作成

3 研究の具体

(1) 研究内容（選択する項目を■にしてください）

- 「Collaboration」【地域・産業界等との連携・推進】
 (内容) ・合同会社小野農園との連携による、「炭鉄港」推進の一環とした商品開発（令和3年度）※令和4年度以降の連携先は未定
 ・夕張市建設課と「持続可能な街づくりの一環とした住宅建設」に向けたデザイン・間取り図の製作（令和4年度）
- 「Literacy」【学んだことを将来に生かす能力】
 (内容) ・生徒の主体性・協調性・創造性・ICT活用能力・コミュニケーション能力の育成・向上（令和3年度～令和5年度）※主に商業科において実施
- 「Adult」【多くの大人が子どもと一緒にあった取組の推進】
 (内容) ・
- 「Student」【生徒理解に基づく指導の充実】
 (内容) ・グループ学習や地域と方々とともに学ぶ機会を通じた共感的人間関係づくり（令和3年度～令和5年度）※主に商業科において実施
 ・段階的に目標をクリアしていくことや、プレゼンテーションの機会を通して生徒の自己肯定感を高めるとともに「自立した18歳」の実現を目指す（令和3年度～令和5年度）※主に商業科において実施
- 「System」【学校と地域の連携・協働の仕組みづくり】
 (内容) ・地域持続性や地域活性化を考えることで、社会の一員としての意識を育む。（社会参画）
 （令和3年度～令和5年度）※主に商業科において実施

(2) 研究成果の普及方法

- ・本校ホームページ
- ・学校通信

(3) 研究のイメージ（概要等）

別紙のとおり

資料 タ 1

(4) 研究組織

① コンソーシアム構成図

※ 1年目は関係者間の緩やかなネットワークづくりを目指す。

- ・北海道夕張高等学校
- ・夕張市役所
- ・夕張市教育委員会
- ・地元企業（小野農園）
- ・空知教育局

（アドバイザー：北海学園大学教授 西村 宣彦 氏）

② 校内体制

職 名	氏 名	担当教科・分掌等
教 頭	尾 崎 慎 一	
教 諭	中 尾 綾	家庭科・教務部
教 諭	田 代 智 志	商業科・教務部
教 諭	若 藤 妃加莉	数学科・教務部

4 その他特記すべき事項

資料 タ1

令和3年 北海道 CLASS プロジェクト研究イメージ

（連携校：北海道夕張高等学校）

テーマ

夕張の未来を創る人材育成のための学校・地域協働体制の再構築

現状における課題

〔地域と学校の連携における課題〕

- ・共通の創りたい未来の姿（ビジョン）づくり
- ・専門人材としてのコーディネーターの不在
- ・多様な組織（人）と組織（人）をつなぐチームとしての機能の創設

〔生徒の学びの姿勢〕

- ・主体的、対話的に学ぶ姿勢の育成
- ・課題解決に向けて人と協働する姿勢の育成
- ・主体的に社会に参画し貢献する姿勢の育成

研究仮説

- ① 地域の将来像を構想し共有した上で、関係者間が協働して取り組むことで、夕張市の地域活性化に繋がる継続性のある取組となるであろう。
- ② 振り返りの場の設定や生徒の意見を反映させる工夫など、生徒が意欲を持ってチャレンジできるプロセスを重視することで、主体的に学習に取り組み、社会の形成に参画・貢献しようとする意識が高まるであろう。

研究内容

〔1年次：令和3年度〕

- 「炭鉄港による地域活性化」をキーワードとした高校生と地域住民、関係者間の緩やかなネットワークづくり
- 「炭鉄港」関連商品パッケージデザインと特産品の考案
- 「高校魅力化評価システム」を活用した「評価方法」の作成

〔2年次：令和4年度〕

- これまでの取組により形成した緩やかなネットワークとコミュニティ・スクールを活かした地域との連携
- 特産品の開発、PR
- 「評価方法」の実施

〔3年次：令和5年度〕

- コミュニティ・スクールや地域コーディネーターとの連携・協働による取組の一層の充実
- 「評価方法」の確立

期待される姿

- 〔高校生〕 夕張市まちづくりコンセプト「Challenge More」を体現する主体性・意欲を身に付ける。
- 〔地域の大人〕 地域をより良い形で未来へ引き継ごうとする。
- 〔地域〕 持続可能な連携・協働体制を構築。

資料 タ 2

令和 3 年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（1 年次） 《第 2 次》

学校名	北海道夕張高等学校
作成日	令和 3 年 9 月 30 日

1 3 年間の目標

<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が地域の活性化や課題解決等について、主体的に挑戦する姿勢や態度を身に付ける。 ・学校及び自治体や企業等が地域課題の解決とそれに取り組むための生徒の学習環境の整備について、持続的に連携・協働して取り組む体制を構築する。
--

2 年次ごとの目標と取組計画

月	取 組
1 年次 (R3)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「炭鉄港による地域活性化」をキーワードとした高校生と地域住民、関係者間のネットワークづくり ・日本遺産「炭鉄港」関連商品のパッケージ・デザインと特産品の考案を通じた「主体的・対話的で深い学び」の実現 ・「検証方法」の確立 <p>(主な取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本遺産「炭鉄港」に関する学習 ・夕張の歴史・産業に関する学習 ・パッケージ・デザインに関する学習 ・デザインした商品に関する市場調査 ・地元農産物に関する学習 <p>(検証の項目) ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価(保護者・教員・学校運営委員等)において、生徒の自主性や主体性に関する質問項目の設定 ・生徒による授業評価において「主体的・協働的な授業をしている」と回答する生徒の割合 ・外部人材を活用した授業の実施数の比較
2 年次 (R4) 【予定】	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元企業と連携して、地元農作物等を活用した商品の開発 ・自治体や企業等との連携を強化した協働的な取組の深化 ・「検証方法」の確立 <p>(主な取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元農作物等に関する学習 ・商品開発に係る市場調査 ・自治体主催・共催の商品開発に係る会議等への参加 <p>(検証の項目) ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価(保護者・教員・学校運営委員等)において、生徒の自主性や主体性に関する質問項目の設定 ・生徒による授業評価において「主体的・協働的な授業をしている」と回答する生徒の割合 ・外部人材を活用した授業の実施数の比較
3 年次 (R5)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の特色を生かしたオリジナル商品の開発 ・自治体や企業等との連携を強化した協働的な取組の発展

資料 タ 2

【予定】	<ul style="list-style-type: none"> ・「検証方法」の確立 (主な取組) ・オリジナル商品開発に係る市場調査、分析 ・自治体や企業等と連携・協働した新たな「ふるさと納税」返礼品の開発 (検証の項目) ※定量及び定性 ・学校評価(保護者・教員・学校運営委員等)において、生徒の自主性や主体性に関する質問項目の設定 ・生徒による授業評価において「主体的・協働的な授業をしている」と回答する生徒の割合 ・外部人材を活用した授業の実施数の比較
-------------	--

3 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
生徒の主体性・協働性	学校評価、授業評価
外部との連携	外部講師の活用状況

4 今年度（令和3年度）の計画

月	取組
4	日本遺産「炭鉄港」について学ぶ
5	夕張の歴史や産業について学ぶ
6	「炭鉄港」関連商品のパッケージ・デザインを考える
7	「炭鉄港」関連商品のパッケージ・デザインを考える
8	「炭鉄港」関連商品のパッケージ・デザインを制作する
9	「炭鉄港」関連商品のパッケージ・デザインを制作する 第1回コンソーシアム会議
10	商品企画について学ぶ
11	地元製品のPRの仕方を考える
12	商品企画のプレゼンテーションを学ぶ 第2回コンソーシアム会議
1	本年度のまとめ
2	第3回コンソーシアム会議
3	

5 その他特記すべき事項

--

資料 タ 3

令和 3 年度 北海道CLASSプロジェクト実施報告書（1 年次）

学校名	北海道夕張高等学校
作成日	令和 4 年 3 月 18 日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	生徒の主体性・協働性
	検証の方法	学校評価、授業評価
	検証結果	<p>・学校評価における評価項目「ICTの活用や各種教育事業を取り入れ、主体的・協働的な学習の充実を図っている。」において、保護者の回答（平均値）が、令和3年度は3.24ポイントと高い数値であり、昨年度（令和2年度）の3.20ポイントから上昇傾向にあることから、保護者は、ICTの活用や、本事業を含めた各種教育事業等を通して、生徒の主体的・協働的な学習が充実していると感じている。</p> <p>* 評価段階… 4（そう思う）、3（どちらかというと思う）、2（どちらかというと思わない）、1（と思わない）、0（わからない）</p> <p>※ 次年度以降、学校評価における評価項目「ICTの活用や各種教育事業を取り入れ、主体的・協働的な学習の充実を図っている。」の（数値による）回答対象を、生徒や教職員、学校運営協議会の委員等に拡大したり、評価項目を追加したりするなど、より多角的な検証が行えるよう検討する必要がある。</p> <p>・本事業の取組の中心となった授業（商業「総合実践」）の授業評価（対象：全履修生徒）において、評価項目「授業の内容に興味・関心がわくように、授業が行われているか。」で、そう思うと回答した生徒が8.3パーセントに留まっている。また、評価項目「『主体的・対話的で深い学び』に着目した授業展開が行われているか。」においても、そう思うと回答した生徒が16.7パーセントに留まっていることから、生徒の興味・関心を高めるとともに、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を一層推進する必要がある。</p> <p>※ 次年度以降、数値の変容を本事業の取組の改善につなげることができるよう、年間複数回の授業評価を行ったり、母集団（履修生徒）が変わるものの、授業評価における経年変化を捉えたりして、より分析的な検証が行えるよう検討する必要がある。</p>

資料 タ 3

②	検証の項目	外部との連携
	検証の方法	外部講師の活用状況
	検証結果	<p>・令和3年度は、本事業の取組の中心となった授業（商業「総合実践」）において、多くの外部講師（4名）に協力いただき、延べ8時間講義していただくことができた。</p> <p>※ 次年度以降も、コンソーシアムを活用した人脈等から、より効果的に多くの外部講師が活用できるよう検討する必要がある。</p>

2 今年度（令和3年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4		・外部講師による講義等「夕張の歴史を学ぶ（産業、炭鉄港、鉄道）」（4～5月）
5		
6		・外部講師による講義等「購買意欲を高める工夫（商品開発のポイント、パッケージデザイン）」（6月）
7		
8	・道教委主催「みんなの教育委員会」で実践発表	・パッケージデザイン制作（6～10月）
9	・第1回コンソーシアム会議	
10	※ 制作したパッケージの「炭鉄港そば」が、夕張市ふるさと返礼品に決定	・市場調査実施（アンケート分析、フライヤー作成）（10月）[道の駅メロード]
11	※ 夕張市ふるさと納税PRイベントで制作したパッケージデザインを披露	
12	・第2回コンソーシアム会議（※ コンソーシアム委員への取組報告会も併せて実施）	・完成披露会実施（パネル作成、パッケージデザインPR、接客、石炭ストーブ体験）（11月）[拠点複合施設りすた]
1		
2	・「オールほっかいどうチャレンジピッチ」で実践発表 ・第3回コンソーシアム会議	・取組のまとめ（2年生への引継ぎ、コンソーシアム委員への取組報告）（12月） ・振り返り（1月）
3		

3 組織化に関する検証【推進校のみ】

(1) コーディネーター選出の方針【教育局記入】

※ 連携校のため、未記入

(2) コーディネーター選出の方法【教育局記入】

※ 連携校のため、未記入

資料 タ 3

(3) コーディネーターとの連携

※ 連携校のため、未記入

(4) コンソーシアム設置に関わっての方針

※ 連携校のため、未記入

(5) コンソーシアム設置に関わっての方法

※ 連携校のため、未記入

(6) コンソーシアム会議における議題

※ 連携校のため、未記入

4 組織化以外の成果等

- 外部講師の専門的な視点からの講義や地域との関わり等を通して、生徒が物事を多角的に捉え、見方や考え方を転換したり、新たな価値を創造したりしようとする態度の育成を図る良い機会となっている。
 - * 参考…「オールほっかいどうチャレンジピッチ」における代表生徒の発表から
 - ・「在校生には、私たち以上にレベルアップして行ってほしいですし、多角的な視野で夕張を広めて行ってほしいです。例えば、新たな特産品をつくるなど、身近なところからできることはたくさんあると思います。一人ひとりが目的意識を持ち、それぞれが満足する取組を行ったら、大きな達成感や満足感が得られ、素敵な経験になると思います。」
 - ・「多くの大人の方々との接点を持つことでいろいろな考え方を知ることができましたし、広い視野で物事を考える大切さも学びました。発表等を通して、主体的に取り組む力やコミュニケーション能力も向上したと感じています。」
- 本事業を通して、生徒が、取組の内容等を発表する機会が増えており、学習意欲を高めたり、多くの方々に本校生徒の取組に関心を持っていただいたりすることができている。
 - * 参考…完成披露会（11月）[拠点複合施設りすた]の振り返りにおける生徒の声
 - ・「今までやってきたことを、みんなに見てもらえて良かった。」
 - ・「当日、思っていたよりたくさんの方が来てくれて、多くの方が関心を持っていてくれたと感じた。市長もりすたに来てくれて嬉しかった。」

資料 タ 4

令和 4 年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（2年次）

学校名	北海道夕張高等学校
作成日	令和 4 年 6 月 2 0 日

1 今年度の目標と取組計画

月	取 組
2 年次 (R4) 【予定】	(目標) ・地学協働事業コンソーシアムと学校運営協議会が有機的に接続した体制の構築 ・地元の農作物等を活用した商品開発に向けた探究的な学びの推進 ・学校と地域の連携・協働の深まりを見取る評価方法等の確立 (主な取組) ・地学協働事業コンソーシアムと学校運営協議会の役割を明確にし、双方の取組内容を関連付ける。 ・市場調査を行い商品開発に係る課題を明確にするとともに、地元の農家や企業等と連携しながら課題の解決に向けて試行錯誤する学習過程を重視する。 ・学校の生徒や教職員、地域の住民等、本事業に関わった人々の変容を的確に捉える評価の観点や方法を定め、試行的に実施する。

2 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
・生徒の主体性・協働性	・学校評価(保護者・教員・学校運営委員等)において、生徒の自主性や主体性に関する質問項目の設定 ・生徒による授業評価において「主体的・協働的な授業をしている」と回答する生徒の割合の推移 ・生徒が記述する「学習の振り返り(自己評価、自己省察)」の分析
・外部との連携	・本事業に関わった地域の人々の数及び関わり方の分類 ・外部人材を活用した授業の実施数の比較 ・自治体主催・共催の商品開発に係る会議等への参加数の比較

3 今年度(令和4年度)の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4		・開発商品の企画立案(4月)
5	第1回コンソーシアム会議	・企画の磨き上げ(5月)
6		・市場調査・企画の見直し(6月)
7		・開発商品の試作(7~8月)
8		
9	第2回コンソーシアム会議	・商談会・展示会等への参加(9月)
10		・パッケージデザイン製作(10月)

資料 タ4

11		<ul style="list-style-type: none"> ・ 開発商品の発表・発表会の実施（11月） ・ 今年度の取組のまとめと2年生への引継ぎ（12月） ・ 今年度の振り返り（1月）
12	第3回コンソーシアム会議	
1		
2	第4回コンソーシアム会議	
3		

4 小・中学校との連携を強める取組

- ・ 夕張市教育委員会学校間連携会議で高校の取組状況を説明する。
- ・ 夕張中学校生徒・保護者対象「高校魅力化説明会」で取組を説明する。
- ・ 夕張市小・中学校 学校運営協議会で高校の取組を説明する。

5 その他特記すべき事項

特になし

資料 タ5

令和4年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（2年次）

学校名	北海道夕張高等学校
作成日	令和5年3月22日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	生徒の主体性・協働性
	検証の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価（保護者・教員・学校運営委員等）において、生徒の自主性や主体性に関する質問項目の設定 ・生徒による授業評価において「主体的・協働的な授業をしている」と回答する生徒の割合
	検証結果	<p>・学校評価における評価項目「ICTの活用や地域と連携した教育活動を取り入れ、主体的・協働的な学習の充実を図っている。」について、保護者の回答（平均値）が、3.13ポイントであった。昨年度より0.11ポイント下回ったが、3年間の推移を見ると大幅な変動はない。多くの保護者から、本事業を含む多様な教育活動を通してICTの活用や地域と連携した取組が促進され、生徒の主体的・協働的な学習が充実しているとの評価をいただいている一方で、本校の教育活動が全ての保護者に浸透していない状況があることが明らかになった（分からないと回答した保護者が12.5ポイントいる）。</p> <p>※次年度以降、保護者や地域の方に本校の教育活動を知っていただくための方策の検討を行う。</p> <p>・生徒による授業評価において「主体的・協働的な授業をしている」と回答した生徒の割合は、3.54ポイントであった。昨年度と比較して0.11ポイント上昇しており、本事業を含む教育活動を通して、主体的・協働的な学習が充実していると感じている生徒が増加している。</p> <p>* 評価段階… 4（そう思う）、3（どちらかというと思う）、2（どちらかというと思わない）、1（そう思わない）、0（わからない）</p>

②	検証の項目	外部との連携
	検証の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・外部人材を活用した授業の実施時間数の比較 ・自治体主催・共催の商品開発に係る会議等への参加人数の比較
	検証結果	<p>・商業科目「総合実践」において、外部講師（協力事業者を含む）6名より延べ8時間の講義いただいたほか、本事業のコーディネーターを兼ねる事業主1名より約40時間で指導・助言をいただいた。昨年度は、外部講師4名より延べ8時間講義をいただいた</p>

資料 タ5

		<p>のみであり、活用した外部人材の人数及び延べ実施時間数が大幅に増加している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自治体主催・共催の商品開発に係る会議等への生徒の参加は、実現できなかった。 ※次年度に向けて、生徒の参加が実現できるよう関係機関と調整を図る。
--	--	--

2 当事者の声について

生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒みんなが一丸となって取り組み、協力して商品開発を行うことができた。実際に商品を作る時もしっかりと役割分担をして、効率よく、滞りなく作業をすることができた。 ・地域の方やイベントに来ていただいた方と関わることができて、とてもいい機会になった。グループで商品を考えたり作ったりしながら、よりよい商品になるように試行錯誤したことがとても楽しかった。夕張の歴史や特産品であるそば粉を、自分たちの力で少しだけでも世に広めることができて嬉しかった。
教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの生徒が課題解決に向けて意欲的に取り組むようになり、学習に向かう姿勢が積極的になっていった。 ・商品開発を通して、一人ひとりの生徒が自分の考えを表明し合い、グループのメンバーの間で意見を調整しながら、力を合わせて課題解決に向かう姿勢が見られるようになった。また、これまで以上に地域に目を向け、地域の課題の解決に貢献したいという意識が強くなった。
地域の方	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方が高校生と関わる機会が増えたことで、高校の取組や高校生の考えをこれまで以上に知ることができた。また、高校生は取組を通してこれまで意識してこなかった地域の魅力に気付いたり、事業者との関わりの中で適切な言葉遣いを学ぶなど、成長していると感じる。 ・生徒が地域の人とコミュニケーションを取りつつ、一生懸命工夫して、商品開発に取り組んできたことが伝わった。

3 今年度（令和4年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4		<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師による講義等「地域活性化」（4月） ・知事に活動報告[なおみちカフェ]（4月） ・外部講師（協力事業者）からの指導（5月～6月） ・試作品制作（6月） ・市場調査実施（アンケート分析、フライヤー作成）[道の駅メロッド]（6月） ・試作品テスト販売（アンケート調査・分析）[学校祭]（7月） ・外部講師による講義等「商品PR」（7月） ・広報活動（フライヤー作成）[さっぽろオータムフェスト]（9月） ・完成披露会実施 [拠点複合施設りすた、北海道庁]（10月）
5	第1回コンソーシアム会議	
6		
7		
8		
9		
10	第2回コンソーシアム会議	
11		

資料 タ5

12	第3回コンソーシアム会議	<ul style="list-style-type: none"> ・活動発表・展示[サッポロファクトリー](11月) ・開発商品発表会[北海道庁](11月) ・取組のまとめ(2年生への引継ぎ、コンソーシアム委員への取組報告)(12月) ・振り返り(1月)
1		
2	第4回コンソーシアム会議	
3		

4 小・中学校との連携を強める取組について

- ・夕張中学校生徒・保護者・教員を対象とした「高校魅力化説明会」で昨年度の取組と今年度の進捗状況について説明した。
- ・高校説明会やオープンスクールで本事業の取組と成果を説明した。

5 学校独自の取組・工夫・実践について

(1) 組織化に関する取組・工夫・実践（校内体制含む）

- ・地域コーディネーター役を担うコンソーシアム委員の週1回程度の職員室への常駐を実現した。

(2) 地域コーディネーターとの連携に関する取組・工夫・実践

- ・地域コーディネーターの週1回程度の職員室への常駐を実現した。
- ・職員室内に先生方と地域コーディネーターの情報交換用のホワイトボードを設置した。

(3) その他

※特になし

資料 タ 6

令和5年度 北海道CLASSプロジェクト実施計画書（3年次）

学校名	北海道夕張高等学校
作成日	令和5年4月20日

1 今年度の目標と取組計画

月	取 組
3年次 (R5)	<p>(目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自治体や企業等との連携を強化した協働的な取組の発展 地元の農作物等を活用した商品開発に向けた探究的な学びの推進 学校と地域の連携・協働の深まりを見取る評価方法等の確立 <p>(主な取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> 地学協働事業コンソーシアムと学校運営協議会の役割を明確にし、双方の取組内容を関連付ける。 オリジナル商品開発に係る市場調査を行い、課題を明確にするとともに、地元の農家や企業等と連携しながら課題の解決に向けて試行錯誤する学習過程を重視する。 学校の生徒や教職員、地域の住民等、本事業に関わった人々の変容を的確に捉える評価の観点や方法を定め、試行的に実施する。

2 今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
Collaboration	本事業に関わった地域の人々の数及び関わり方の分類
Literacy	生徒が記述する「学習の振り返り（自己評価、自己省察）」の分析
Adult	本事業に関わった地域の人々の数及び関わり方の分類
Student	生徒が記述する「学習の振り返り（自己評価、自己省察）」の分析
System	学校評価(保護者・教員・学校運営委員等)において、生徒の自主性や主体性に関する質問項目の設定

3 今年度（令和5年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4		・協働企業決定（4月～5月）
5		・協働企業と開発内容の確認（6月）
6	第1回コンソーシアム会議	・企業試作品第1弾作成・確認（6～7月）
7		・市場調査（7月）
8		・見直し・生徒試作（7～8月）
9	第2回コンソーシアム会議	・企業試作品第2弾作成・確認（9～10月）
10		・商品発表会（10月）
11	全道地学協働活動研究大会	・商談会・展示会（11月）
12	第3回コンソーシアム会議	・振り返り（12月～）
1		
2	第4回コンソーシアム会議	
3		

資料 タ6

4 自走可能な体制整備に向けた方策

- ・自治体の事業とタイアップ
- ・本プロジェクトのコンソーシアムを総合的な探究の時間へスムーズに移行
- ・予算の確保

5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

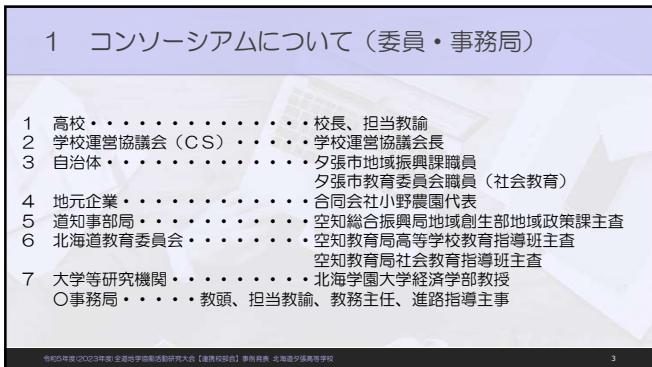
担当職員の交流を通じて、プロジェクトの取組が一部の生徒や担当者だけの取組ではなく、学校全体の取組にするための方策を考える機会を設ける。

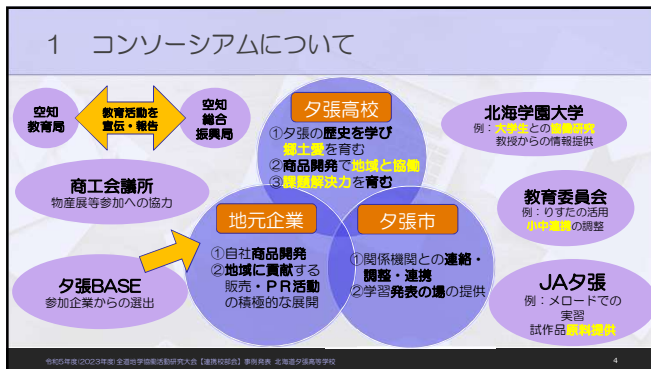
6 学校独自の取組・工夫

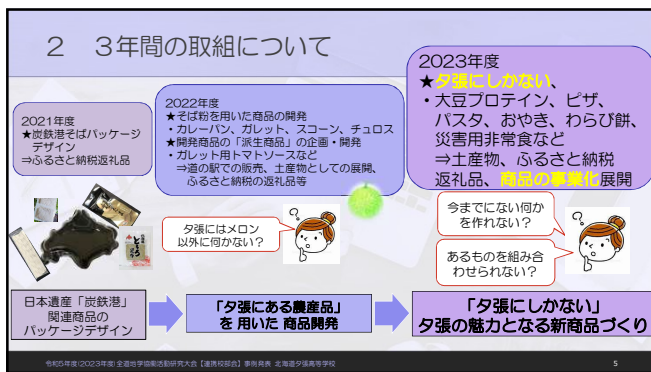
7 その他特記すべき事項













4 成果について

- **地域や産業界**等との連携・推進
「社会に開かれた教育課程」を視野におき、**顔の見える横の連携や支援体制**を形成
- **学んだことを将来に生かす能力**
高校生が**地域の一員**としての意識を高め、創造と発展に**主体的かつ協動的**に取り組む力を育成

令和4年度「2022年度」全国高等学校模範校研究大会【連携の部】事務局 北海道夕張高等学校

4 成果について

- **大人と生徒が一体**となった取組の推進
地域の**大人が**地域課題探究型の**学習に参加**し、地域の未来を創る**人材を育成**
- 生徒理解に基づく**指導の充実**
生徒の学習状況や**地域の変容を的確に捉える**評価方法を設定し、生徒理解に基づく**適切な指導**に活用
評価の取組を通し、**地域との共通理解**を深化

令和4年度「2022年度」全国高等学校模範校研究大会【連携の部】事務局 北海道夕張高等学校

4 成果について

- 学校と地域の**連携の仕組みづくり**
持続可能な連携体制の構築
 - ➡ **地域コーディネーターの確保・育成**
令和4年 夕張市役所 **地域振興課職員** 夕張高校**職員室への派遣**
(週2～3回)
 - 令和5年 夕張市採用 **地域コーディネーター** 夕張高校**職員室への派遣**
常駐

令和4年度「2022年度」全国高等学校模範校研究大会【連携の部】事務局 北海道夕張高等学校

5 課題と展望

- 持続可能な連携協働体制の確立 地域CN 入付ステップ
- 連携協働組織(コンソーシアム)の拡大 異校種学校 企業等
- 取組内容の広報(PR)活動 全市内 全国
- 総合的な探究の時間への移行 全教職員+全生徒

令和5年度(2023年度)全道地学協働活動研究大会【連携校紹介】事務局員 北海道夕張高等学校

5 課題と展望 (今後の地域との関係の在り方)

《支え》

教育局
総合振興局
との協働

《強み》

市との協働
地域振興課

- ・高校魅力化
- ・地域振興企画
- ・地域CN

令和5年度(2023年度)全道地学協働活動研究大会【連携校紹介】事務局員 北海道夕張高等学校

ご清聴ありがとうございました

北海道夕張高等学校

資料 タ 8

令和 5 年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（3 年次）

学校名	北海道夕張高等学校
作成日	令和 5 年12月19日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	Collaboration
	検証の方法	本事業に関わった地域の人々の数及び関わり方の分類
	検証結果	コンソーシアム委員に地元商工会議所も関わってもらったことで、開発商品を製品化する際に地元企業の協力を得ることができた。

②	検証の項目	Literacy
	検証の方法	生徒が記述する「学習の振り返り（自己評価、自己省察）」の分析
	検証結果	特産商品開発をする中で、地域についての探究活動を通して、地域への理解をより一層深めることができた。

③	検証の項目	Adult
	検証の方法	本事業に関わった地域の人々の数及び関わり方の分類
	検証結果	年を追うごとに、より広い分野の人材との関わりをもつことで地域への理解も深まり、よりよい商品開発に繋がった。

④	検証の項目	Student
	検証の方法	生徒が記述する「学習の振り返り（自己評価、自己省察）」の分析
	検証結果	試行錯誤を繰り返しながら、他者との関わりをもち、互いの意見を尊重しながらよりよい製品を作り上げることができた。

⑤	検証の項目	System
	検証の方法	学校評価において、生徒の自主性や主体性に関する質問項目の設定
	検証結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の学習状況や地域の変容を的確に捉える評価方法を設定 ・ 「主体的・協働的な学習の充実を図っている」の「そう思う」の保護者の割合 ⇒ 【R4】 50%（前年比 13.8 ポイント増加） ・ 「生徒は、夕張市の地域活動等に積極的に参加している」の「そう思う」の保護者の割合 ⇒ 【R4】 62.5%（前年比 37 ポイント増加）

資料 タ 8

2 当事者の声について

生徒	これ無理じゃない？と思ってもまずはやってみる。やってみてダメだとしても、自分にとって、班員にとっても良い成長になる。失敗したから違うアプローチでやっていこう！という事もできるのでまずはやってみる。
教諭	探究のサイクルを繰り返し行うことで、自分たちで企画したことを最後までやり抜こうとする姿勢が身につき、小さな成功を重ねることで自己存在感の高まりを感じている生徒が増えた。
地域の方	新聞報道等で生徒の取組については知っている。地域の大人と地域の子どもたちが一緒になって地域活性化を盛り上げるのは良いことで、これからも継続して行ってほしい。

3 今年度（令和5年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4		<ul style="list-style-type: none"> ・ 協働企業と開発内容の確認（6月） ・ 市場調査（7月） ・ 商品の生徒試作（6～9月） ・ 試作品発表会（10月） ・ 協働企業決定（10月） ・ 企業試作品第作成・確認（10～11月） ・ 知事、教育長への試作品 PR 訪問（12月） ・ 札幌学院大学ビジネスプランコンテスト出場（12月） ・ 振り返り（12月～）
5		
6	第1回コンソーシアム会議	
7		
8		
9	試作品発表会	
10		
11	全道地学協働活動研究大会	
12	北海道知事・教育長への訪問	
1		
2	第2回コンソーシアム会議	
3		

4 自走可能な体制整備に向けた方策について

<ul style="list-style-type: none"> ・ 開発商品を継続販売できる体制を整えた。 ・ コンソーシアム委員それぞれの役割を明確にした。 ・ 異校種学校や新たな企業との連携を充実させる。
--

5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

<p>非常食に係る商品開発に当たり、専用容器の作成などについて滝川工業高校に助言を求め、制作のご協力をいただいた。</p>

資料 タ 8

6 学校独自の取組・工夫

- ・夕張市採用の地域コーディネーターが職員室に常駐。
- ・協働可能な事業者を募集するため、YouTubeにて紹介動画の作成と公開。
- ・市民を対象とした企画商品試食会を実施し、感想や意見の収集。

7 その他特記すべき事項

- ・夕張高校×夕張市×札大・道薬科大・文教大との連携プロジェクト開始。
- ・知事と教育長への成果報告。

< 3年間のまとめとして >

8 3年間の成果

- ・本プロジェクトに取り組む中で、地域と連携した商品開発の一つのモデルを獲得した。また、自治体や企業等との連携をとおして、多くの人脈を得ることができた。来年度以降は、全国規模の大手小売りチェーンの協力を得て、より一層実践的な地域課題探究に取り組むことができるようになった。
- ・地元企業に本校生徒の活躍を評価していただき、地元企業からの新規高卒者の求人数が増加した。令和5年度卒業生は、管内の就職希望者全員が、夕張市役所をはじめとした管内の就職先に、希望通りに就職を決定した。

9 3年間の課題

- ・地元の農作物等を活用した商品開発に向けては、更なる市場調査などの探究的な取組を推進することで、地域の資源を掘り起こすことができる。
- ・地元の異校種学校との連携体制を構築し、地域の学校全体で地域活性化に取り組む活動を推進することで、より多くの地域住民の関わりを得ることができる。
- ・本プロジェクトで得た探究的な学びの手法を他教科とも共有し、幅広い教科横断的な学習を充実させる体制の確立が必要。